21

つながりが
生み出す力

富士山から変えていく

野口 健

ごみ意識のきっかけはエベレスト

誰でも、初めから環境への配慮ができているわけではない。私もどちらかといえば鈍感なほうだった。

環境問題を意識するようになった最初は一九九七（平成九）年のこと。初めてのエベレスト挑戦のときだった。

当時私は世界七大陸の最高峰登頂最年少記録の樹立をめざし、国際公募登山隊の一員として、エベレスト入りしていた。

写真や映像で見るエベレストの気高く神々しい姿に憧れ、その頂上に立つ日を夢見てイメージトレーニングを重ねていた。

ところが、いざベースキャンプ地点に着いてみると、想像していたのとはずいぶん様子が違う。まず、人が多い。たくさんの登山隊がひしめき合うようにして陣を張っている。そして、至るところにごみが散らかり、強風に舞い上がっている。もっとひっそりとして自然環境の美しいところを想像していたから、ちょっと拍子抜けした。

エベレストのような高所登山は、行程として、だいたい二か月くらいかける。

まず拠点とするベースキャンプを張る。そこから高度に体を慣らしながら、何往復もしてキャンプを設営して登っていく。

▲エベレスト
エベレスト山。ネパール東部、中国の国境に接するヒマラヤ山脈の世界最高峰（標高八八四八メートル）。チョモランマ、サガルマータともいう。

▲ベースキャンプ
高所登山などをするときに、必要物資を集積し、登山を開始する根拠地となるキャンプ。

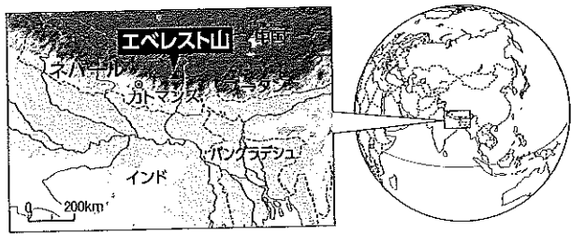
●エベレストでの清掃活動

登頂までの残り数日を、体調を整えて過ごしたいと思っていたときのこと。隊長が「アタックまでの間に、みんなでベースキャンプ周辺のごみを拾おう。」と提案した。

ごみだらけのエベレストを目の当たりにして、私も確かに驚いた。しかし、登頂という自分にとっての大きな目標を前にして、なぜほかの登山家たちの残したごみを拾わなきゃいけないのか、今はそれどころじゃないんだ、という気持ちでいっぱいだった。

隊長の提案に、「ノー！」と言おうと言葉が喉元まで出かけた瞬間、ほかの外国人登山家が威勢よく「グッドアイディア！」と応えた。ほかのメンバーも賛同して、またたく間に場が盛り上がってしまった。

こうして、しぶしぶごみ拾いに参加せざるを得なくなったのだ。



●エベレストで清掃活動をする野口さん

辺りに派手に散乱していたのは、私たちの直前に撤退した韓国隊のごみだった。あまりの汚さにうんざりして、思わず愚痴がこぼれた。

「韓国隊のごみはひどいね。日本人はこんなことしないよ。」

すると、長い付き合いのシェルパが「ケン、ちょっといいか。」と私を促した。彼のあとについていった先にあったのは、さらに大量のごみの山。漢字、ひらがな、カタカナといった日本語の食品パッケージなどから、明らかに日本隊のものだとわかる。私はがくぜんとした。

一緒に行動していたメンバーから、痛烈な言葉が浴びせかけられた。

「日本人はエベレストをマウント・フジにするのか！」

「日本は、経済は一流だが、文化やマナーは三流だな。」

いつもなら負けじと言い返すのだが、このときばかりは言葉が出なかった。

なぜ富士山が引き合いに出されるのかわからなかった。

富士山の汚さは彼らにとっては共通認識だったのだが、当時の私は雪に覆われていてついた厳寒期の富士山しか知らなかったので、富士山がどれほど汚れているかまったく知らなかった。

ただ、海外の登山家たちの非難の言葉が、頭から離れなかった。

▲シェルパ
エベレストなどの登山で、隊の一員として荷物の運搬、案内などをする人。本来はネパール北東部に住むチベット系の一民族であるシェルパ族のことをさす。

▲富士山
標高三七七六メートル。二〇一三年六月、世界遺産（文化遺産）に登録された。

▲いてついた
凍りついた。

日本一美しい山は、日本一汚い山だった

二〇〇〇年五月、初めて夏の富士山に登って驚いた。なぜこんなにごみが落ちているのか？　本当にごみだらけじゃないか。

山頂には自動販売機がずらりと並ぶ。こんな高地にまで自動販売機を置いている山など、世界中で日本にしかないだろう。その空き缶などもあちこちに転がっている。

そして、どこからともなく漂ってくる悪臭。山小屋からの汚物の臭いだ。トイレから、し尿が流され、トイレットペーパーが山肌に無残な白い川筋を残している。垂れ流し状態なのだ。汚物は地中に吸い込まれていくが、富士山は湧き水豊富な山だ。ぞっとした。

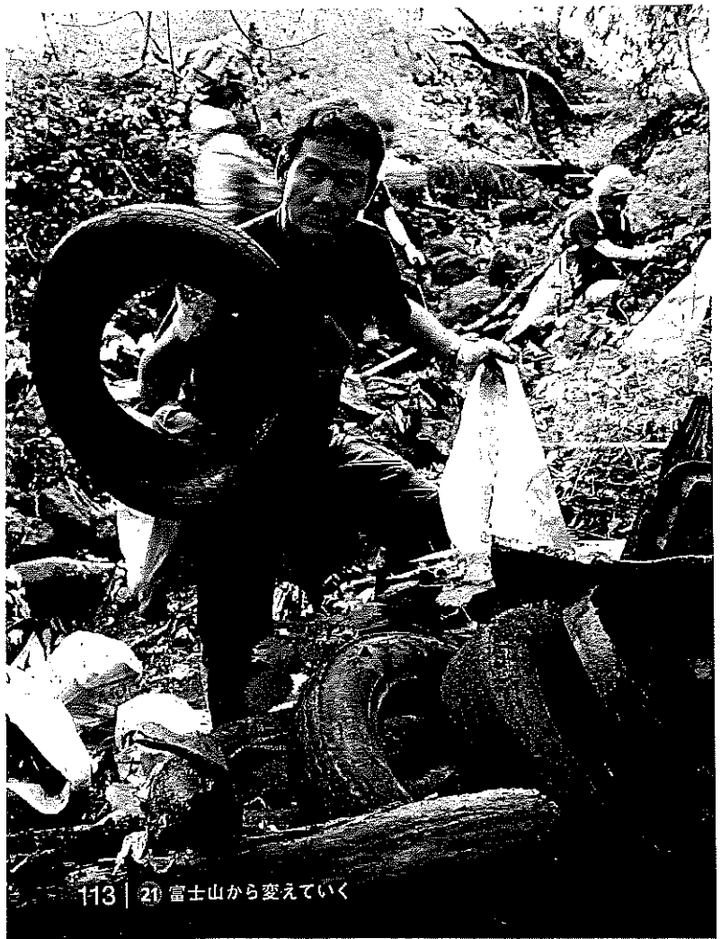
山を降りて青木ケ原樹海に足を踏み入れると、そこには不法投棄されたごみが山積していた。車、家電製品、ドラム缶、タイヤ、バッテリーや電池、注射器などの医療廃棄物、アスベスト……。土からは、それらのごみが長く放置されていることが原因と思われる、すえた異臭がした。

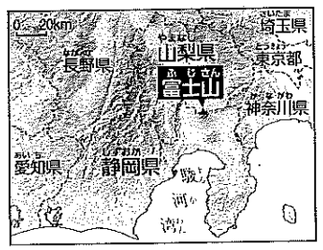
これでは「世界でもっとも汚い山」と冠されるのも無理はない。

これが、雪と氷に閉ざされていない時期の富士山の本当の姿だったのか。知らない山じゃなかっただけに、ショックが大きかった。

なんとかしなきゃいけないだろう――。私の心に火がついた。

●富士山の清掃活動に取り組む野口さんたち





富士山がよみがえる日

富士山とヒマラヤの清掃活動に取り組んできて、はっきりわかったことがある。

人間一人ひとりの力は微々たるものかもしれないが、結集することで非常に大きな力になるということだ。それぞれが「自分たちの力で、この状況を変えていく。」という意識をもち、行動に移すことで、世界は確実に変わっていく。

何より顕著な例が富士山だ。

私が富士山の汚さを知り、清掃活動を唱え始めたのは二〇〇〇年から。最初は清掃への協力を呼びかけても、百人も集まらなかった。

しかし、富士山の汚さが世の中に広く知られるようになって、「このままではいけない。」「どうにかしなくては。」と考える人が年々増えてきた。二〇〇七年度についていえば、一年間で延べ六千人以上の人たちが、私たちの行う富士山清掃活動に参加してくれた。

それだけではない。登山者がポケットから小さな袋を取り出してごみを拾っている姿をよく見かけるようになった。すれ違いざまに、

「野口さん、ごみ拾ってますよ。」

と声をかけてくれる人もいる。

富士山には年間約三十万人が登るといわれている。仮に一人が一つを拾えば、その瞬間に三十万個のごみがなくなる。もちろんすべての人がごみを拾うわけではないが、拾う人は何個も拾ってくれる。人々の意識がなければ汚れるのは早いが、逆に意識があればきれいになるのも早い。「みんなの力」はじつに偉大だ。

現に、富士山の五合目から上は、本当にごみがなくなった。

作・野口健『富士山を汚すのは誰か』角川書店による

●2013年，ユネスコの世界文化遺産に登録された富士山

考えてみよう

野口さんは「意識をもち、行動に移すこと」がなぜ大切だと考えているのだろう。

自分に＋1

みんなが力を合わせることで、変えられることはないだろうか。